2020 夏

子どもの瞳の中に

すくすく広場感想文集

第２集

２０２０年夏

一般社団法人すくすく広場

もくじ

ページ

巻頭言「これから通り」　・・・　理事長　丸山綱男　1

在宅生活を経験して　・・・　坂本佳代子　2

今、私達が問われているもの　・・・　赤嶺菊江　4

「すくすく」の活動に思いを重ねて　・・・　石井かつ子　7

小中高生勉強会のこと、いくつか　・・・　石塚洋子　8

コロナによる自粛中に見えたこと　・・・　鈴木智子　9

キーワードはインフォメーション　・・・　杉沢正子　10

「コロナ禍での羽生の杜」　・・・　田村信征　12

コロナ禍の中で考え、行動したこと　・・・　戸恒和夫　14

プチパントリーのお手伝いを体験して　・・・　中島君子　20

おしゃべりしながら　・・・　信田めぐみ　21

友人に誘われて参加しました　・・・　新井孝代　22

先輩たちの背中を追って　・・・　猪口りい子　22

子どもたちの笑顔と歓声にふれて　・・・　増田雄一　23

味方であり続けること　・・・　林　実　23

子どもを真ん中にした地域コミュニティー：すくすく広場・・丸山綱男　24

すくすく広場公開講演会　・・・　記録・山口哲司　26

令和元年５月２６日(日)　於：不動岡公民館

講師：愛沢隆一氏　(日本社会福祉司会アドバイザー)

「子どもの虐待対策　児童相談所及び地域の役割」

３月アンケートのまとめ　・・・　赤嶺菊江　34

巻頭言

「これから通り」

すくすく広場 理事長　丸山　綱男

はじめに

この度、私こと、5 月に理事長を引き継ぐことになり、ご挨拶を申し上げることになりました。会員の皆様、すくすく広場にご支援をいただいています皆様方には、今後とも「広場」へのご理解とお力添えをお願いいたします。

さて、巻頭にはいささかそぐわないかもしれませんが、雑感を綴りたいと思います。

■通用しない「今まで通り」

本年はご案内の通り、新型コロナウィルスの影響ですくすく広場の開催もずっと休止を余儀なくされています。だれも予測できない事態が世界的な規模で起きてしまいました。

新型コロナの感染への恐れは、想像を超えています。人が想像できないということは、今まであり得ないことでしたが、超えているのです。「いままで通り」では全てが通じないのです。「これから通り」の見方・考え方を変えなければ、全てが想像を超えてしまい、私たちはコントロールできなくなるのです。

新型コロナ感染対策として第一に「人が集まる」のを避けることが宣言されました。そのことが引き金になって、「いままで通り」を根本から変えられてしまったのが“人間関係”だと思います。

人間という言葉は、私たちが人と人の間を生きる存在であることから出来た言葉です。人はひとりでは生きていけません。ひとりではヒトになれても、人間にはなれません。

ところが、今、感染防止の対策として社会的距離（ソーシャル・ディスタンス）をつくることで、人と人との間をあけることが求められています。人の間をあけることは病理学的には適正ですが、人と人の間にある“こころ”にほころびが出ないのか深刻に考えてしまいます。すくすく広場は、人と人が出会い、そして人の縁が生まれ、その縁が豊かな人になることを願って活動を積み上げてきました。しかし、すくすく広場も新たな課題に直面しております。

次の記事は、すくすく広場にとって相容れないものと、考えさせられるものと？

■感染終息途上であるが　～「これから通り」に関する記事を拾うと～

・これまでのように「これをオンラインで行う必要はありますか？」とたずねるかわりに、「これを実際に会って行う必要はありますか？」とたずねるようになるかもしれません。

・これからの社会ではリアルで会わずとも、相手との信頼関係を築くスキルが求められるようになります。「一度でもリアルで会っていれば、その後はリモートでもいけるかもしれない。」と指摘しています。

・人が動く時代からモノが動く時代になる。

・ネット通販や動画配信サービスなどのデジタル消費の流れが加速した。

―等々、人間関係とデジタル関係との混在化が、急激に人間性をも変えようとしていることに無関心ではいられません。

むすびに

今年度も、すくすく広場を一歩でも半歩でも前に進めたいと考えています。新型コロナに妨げられる状況があるにせよ、“人と人の間にあってこそ、人になる”ことを大切にした広場にしていきたいと思います。

在宅生活を経験して

坂本佳代子

私の人生の中で、在宅時間が一日の中で一番多くなるなどということは,今回が初めてなのではないかと感嘆している。

しっかりと外出したのは

・新宿区福祉事務所でのホームレス心理相談

・中野区にあるホームレス自立支援ホームの心理相談等

・上尾市内で実施されたネットカフェ難民の居宅支援等相談

の 3 種類のみであった。

我が家に居て、図書館から借りた 20 冊強は直ぐに読み終えてしまい、後はすることがない。だいたい、読書は隙間時間で行なう習慣がこびりついているものだから、有り余る時間の中で本を読んでいるなんてことは、後ろめたくて仕方がない。

やっと、健康維持のため，散歩でもするかと重い腰を上げたのは 5 月の連休明けである。ところが歩くことによって私は＜我が町新座＞を再発見する事が出来たのである。近くに農産物直売所があることは知っていた。しかし土日の 8 時から 14 時限定の開店だったため、50 年近く住んでいるにもかかわらず，買いに行けたためしがない。この度始めて、そこでお買い物が出来たのである。購入してレシートに感心してしまった。商品の名前は書いてないのである。その代わりに生産者のフルネームが書き込まれている。「並木〇〇　150 円・鈴木〇〇200 円」といった塩梅である。そしてその野菜達はどれも香り高く、ついつい生のままかじってしまう。

我が家の近くを流れる太古からの川沿いには、プレ縄文遺跡を始め、様々な年代の遺跡が並び、河岸段丘の織りなすグリーンベルトには東京隣接地とは思えないほどの鳥類が生息している。しかも樹林の中には木彫工房がいくつもあったのだ。

ついに私は、このままのんびりと在宅生活が続いてもいいのかなあと最近は思い始めるに至った今日この頃である。

黒目川河岸段丘

今、私達が問われているもの

赤嶺菊江

私は悪い夢を見ているのか？と、何度も思った。テレビも新聞も新型コロナウイルスの感染拡大の恐怖の情報が、朝から晩まで流れている。「三密を避けろ」「濃厚接触はダメ」「ステイホーム」「テレワーク」「不要不急の外出を避けろ」など、これまでの私と真逆の生活が要求された。

3月からの活動のほとんどが中止、又は延期となり、私の手帳の3月と4月は棒線で塗りつぶされ、真っ黒になった。そして、5月からの手帳は孫の世話以外ほとんど予定がないと言うか、予定を入れられなかった。親しい人に会うことさえ躊躇した。新型コロナウイルスを巡る沢山の情報を観ても、医療の専門家でも経済の専門家でもない私には、何が正しくって何が間違いなのか、判断がつかないことばかりだった。

ただ分かるのは、今は歴史的危機状況だという事だった。想像した事も、経験した事もないような危機的状況の中に、自分だけでなく大切な家族や友人や知人あらゆる人達が立たされている。この出口の見えない闇の中で、悶々とした日々をずっと過ごしていた。

私が学生時代からずっと支援を続けて来た冤罪狭山事件も、沖縄の辺野古への新基地建設も、また原発問題も待ったなしの重要な時期にあるにも関わらず、全ての行動が延期又は中止となり、気が焦るばかりだった。

そして、一番気にかかるのは「給食が唯一の重要な栄養源」かも知れない子ども達の事だ。それから、虐待されているかも知れない子ども達の事。こんな時こそすくすくの出番！と思いながらも、殆どの公共施設が使用禁止となり、子ども食堂は開く事が出来なくなってしまった。

そんな中でも、戸恒さんを先頭にさまざまな方達の努力で、お弁当の配達や食材の配達などの活動は出来た。これは4年間のすくすくの活動の賜物と言えるのではないか？と思う。すくすく広場子ども食堂の活動を続けながら、いつも頭をよぎるのはまだまだ本当に手を差し伸べるべき子ども達に、私達は出会えていないのでは？と言う事だった。

でも、昨年頃から、遠回りしているかも知れないけど、すくすくは確実に目標に向かっている事を感じられるようにもなった。さまざまな活動や多くの方達との出会いが力となったように思う。

ところで、給付金の書類が先日私の所に送られて来たが、あのアベノマスクは未だに届いていない。アベノマスクをはじめ、今の安倍政権の新型コロナ対策への不満が爆発寸前だ。そもそも、ＰＣＲ検査の数を大幅に抑えた事によって、感染が拡大してしまった事は誰もが知っている事実だし、感染者を隔離はしても治療はしないために、沢山の大切な命も奪われた。

そんな中、安倍総理は「ステイホームしましょう」と、犬を抱きリモコンを操作しながら自宅で寛ぐ様子をネットで流した。あの動画を観て、この人には人の痛みを

想像しようとする気持ちが１ミリもない人だと感じた。正直あの動画を見ていると吐き気さえ感じた。こんな人が私達の国のリーダーかと思うと情けなくも思った。
　新型コロナウィルスが感染拡大する中で、マスクや給付金を一番必要としている方達がいる。勿論、医療従事者の方達もそうだけれど、私が今思うのは路上生活者の方達だ。いつか、丸山さんが「花見が禁止された為に空缶が拾えず、路上生活者の方達が大変な状況になっている」と、あるテレビ番組の話をすくすく通信に投稿された。私はそれまで、考えても見なかったのでとてもショックだった。
　路上生活者の方達には住民票がない方が殆どの為、マスクも給付金も支給されない。でも､今の状況の中で最もマスクと給付金を必要としているのは、路上生活者の方達なのではないだろうか。安倍総理はマスクや給付金をどうしたら、路上生活者の方達に送る事か出来るか考えた事があるだろうか？イヤイヤ、路上生活者の方達に支給するなど、鼻っから考えていないだろう。
　山谷や釜ヶ崎などで、路上生活を余儀なくされている方達への支援活動を長年している知人達が、「アベノマスクをいらない人は、送って下さい！アベノマスクであろうとなかろうと、命を守る為にマスクが不可欠です！」と、ネットで呼びかけていた。是非、周りの友人達にも声を掛け送りたいと思う。
　今回に限らず、社会が危機的状況に瀕すれば瀕するほど、その被害はいつも弱い側に追いやられた方達が一番受ける。「学校の給食が唯一の貴重な栄養源だった」かも知れない子ども達が、突然３ヶ月以上の長い間給食が食べられなくなった。「安心安全の場である筈の家庭が、実は地獄だったかも知れない日々虐待の恐怖に晒されている子ども達」は、どんな日々を今送っているのだろう。
　コロナ禍以前に、苦しい状況を強いられていた人達は他にも沢山いる。私達に今一番問われているのは、社会の中で弱い側に追いやられた方達に想いを寄せられるかのように思う。その国の民主主義の完成度は、どれだけ弱い側に追いやられた人達に、手を差し伸べられた政策がされているかどうかだと、何かで読んだ気がする。
　すくすくも今、それが問われているように思う。今後もどんな事が起きるか分からない。新型コロナウィルスの第二波第三波もあると専門家は言う。災害の多い日本では、避難所での感染拡大も心配だ。いろいろ考えると、不安で思考が停止状態になってしまいそうだ。でも、今回これまでのあたり前の日常が奪われる事で、自分にとって何が大切かが見えてきた気もする。

　すくすくも大きな転換を迫られるのかと思ったりもする。公の力と民の力を出し合いながら、どうしたら、一番しんどい子ども達に手が届く活動が出来るか、今まで以上に真剣に考えなければならないと思う。公共施設が使えなくなったら何も出来なくなってしまうのではなく、別の手を早急に考えなければと思う。また、みんなで集まって、ああでもないこうでもないと意見を交わせる日が待ち遠しい。
　この文集が完成する頃は、社会は落ち着きを取り戻しているのだろうか？
「ステイホーム」の日々によって体重も増え、足腰は弱り､頭も心も働かなくなっ

た。「ステイホーム」がこれ以上続いたら、お尻に根っこが生えてしまいそうだ。1日も早く、元の日常に戻りたい。

「すくすく」の活動に思いを重ねて

石井　かつ子

「すくすく」の活動を約四年間（立ち上げる活動をも含めて）続けてきた。年齢を重ねて、エネルギーは減退を感じているのに、気持ちは、ますます「すくすく」にのめり込んでいる感じがする。今はコロナ騒ぎで、思う様な活動ができないが。

十年近く前、夫を見送ってから自分の立ち位置を失っていたわたし。夫は、一回り以上も年上で、年を重ねていても頑固というか信念が強いというか、良くも悪くも（物珍しさも手伝って）それがおもしろくてついていった。四十数年、夫に合わせてきた人生（夫からすれば反論はあると思うが）の基盤を失い、虚しい思いから抜け切れない生活を続けていた。そんな時、「すくすく」と出会ったのだ。「まだ人のために、社会のために何かをやれる」、それが、虚しさから私を救ってくれた。

「すくすく」は、今では活動が広がり、あれもこれもとてんてこ舞いのこともある。わたしが長年続けてきた趣味へのエネルギーの配分が減っていく。でも「すくすく」での子どもとの活動は、現実的で魅力にあふれている。自分がまだできるという思いや、関わっているという安心感も持っていたい。（欲張りな自分がいる）ふと、「理事をやめてもできる」と思いつく。まわりを見回したら、成長している「すくすく」には、力強い仲間たちがたくさんいることに気付かされた。（相変わらずおめでたいわたしでした）

私は、「すくすく」の活動を通して、たくさんのことを学ばせてもらっている。その中での大きな収穫は、わたしの今までの生活の中で出来上がっている既成概念が塗りかえられたことだと思う。目がさめる思いをしたことが何度となくあった。それは、仲間の人たちの考え方であったり、行動であったりする。社会の出来事への考え方しかり、調理においての野菜の切り方に至るまで。そんな経験が、自分の生き様にふくらみを持たせ、新しい自己が生まれるような豊かな気持ちになるし、自分は素敵な世界で生きているという実感をもたらしてくれる。

これからも「すくすく」の活動をできる範囲で続けていきたい。活動の基本的な考え方として、「子どもの幸せを願う」には、どう行動すればよいか、これからも自分に問いかけていこうと思っている。子どもは、一人一人それぞれ違う。子どもたちとつきあうための大人としての力が試されていると、これからも覚悟していこうと思っている。もう教師ではないし、教職を経験した一人の大人にすぎないのだから。

そして、仲間の人たちと一緒になって、子どもたちに大人としての「気概」を伝えていけたらと思っている。例えば、コロナ騒ぎの第二波が来た時に、安全な状態で、食事を提供できるようなことを今から準備すること。こんなときは、学習より食事や人のぬくもりの方が大事だと思う。それがあってこそ、子どもたちに気力が生まれると思う。

小中高生勉強会のこと、いくつか

石塚　洋子

小中高生の勉強会のスタッフは、教員経験者だけではなく、また、学生の人も参加していただけています。子どもの方も小学校 1 年生から高校 3 年生までと年齢の幅がありますし､個性も様々ですから､お互いに年齢層や経験が多様な人と関われるのは、とても良いことだと思います。

日頃の勉強会では、近づくと「大丈夫です」「一人でできます」と言って、見られたり、話しかけられたりするのを警戒しているような子どもがいます。好きなペースで取り組みたいのかもしれません。教えてもらったり、質問することが苦手なのかもしれません。ついおしゃべりが始まってしまう子どももいます。勉強の雰囲気を作って保っていくのは大きな課題です。

クリスマス会の中で、子どもたちのグループ発表の場がありました。前の週までにグループを決めたり、発表することの相談をする時間もとって、当日は想像以上の充実した発表で、時間が足りなくなるほどでした。ちゃんと協力できて、物怖じすることなく発表できた子どもたちの様子に感心しました。

2019 年度は学習委員長をお引き受けしたものの、家庭の都合で日頃の勉強会だけでなく集中勉強会にも参加できないことが重なりました。それでもスタッフの皆さんに温かく支えていただきながら過ごせた一年間でした。

この原稿を書いている現在、新型コロナ感染症の関係で、小中高生勉強会は 2 月末から依然として開けていません。

皆さん、どうしているかしらと思う毎日です。また再開できる日を心待ちにしています。(2020.5.24)

コロナによる自粛中に見えたこと

鈴木　智子

今回、上記タイトルについていろいろ思うことがあったので書かせて頂きたいと思います。

まず、コロナウィルスで治療が間に合わず、命を落としてしまった方や治癒しても後遺症が残ってしまった方など取り返しのつかない支障が出てしまった方々、その最前線で感染の恐怖と向き合い働く医療従事者の方々については、大変気の毒に思います。今までの風邪やインフルエンザだったら罹患してもある程度は仕方ないかなという感覚でしたが、今回のコロナに関しては治癒したとしても基礎疾患として肺などに影響が残ってしまうとのこと、自分自身も身の周りの人達にも絶対かかってもらいたくないものだと思っています。

だからこそ、今回の自粛要請は真面目に取り組まないといけないのですが、日本での感染者数が増え、3 月末にますます身近に感じるようになり、世の中の雰囲気も緊張感が高まっている時、私も多くの人と同じように仕事が減り自分の子どもの学校は休校延長になり、保育園からは家庭保育を何度も勧められ、そのためにますます仕事もしづらい状況になったのですが、とても楽観的に捉えていました。これを機に生活スタイルを大きく変えようと思いました。一昔前の古き良き日本に一時でも戻れる気がして期待する気持ちすら芽生えました。

思えば、すくすく広場の活動を知り、即座に会員になりたいと思った時、私が心に抱いていたのは、古き良き日本の良さを取り戻したい、そんな気持ちからでした。すくすく広場の活動のように親子関係だけでなく、会員の方々と遊びを通して縦と斜めの関係を築くことが出来る､そんな良さです｡現代社会では生活がとても便利になり、そのために生活にいろいろとお金がかかるようになり、消費が増え、生活のために働き、そしてさらに忙しくなり・・・そんな風に生活に追われ、近所の人達と付き合うことも親子の関係ですらもゆっくり話すことがなくなり、そんな生活に少しむなしさを感じていました。車があり、電車に乗れて、交通費を払えばどこにでも好きなところに行ける、それでいいのかな？どこにでも行けてお金を払えば子供を楽しませられる、でもそれでいいのかな？ないものがあれば１００円ショップなどでも安く何でも買える、でもそれでいいのかな？・・・と。

自粛中に一番良かったことは子供と過ごす時間が増えたことです。子供が学校に行っていた時は帰ってくると宿題や次の日の準備に追われて勉強を見てあげたり、子供とゆっくり話し、向き合うことも出来なかったけど、今はゆっくり宿題を見てあげることも、子供が今後勉強で困らないように先の勉強を教えることも出来て、その他工作を作ったり、料理をしたり、部屋の片づけをしたり、庭の雑草を取ったり・・・自分がしてあげたいことを存分に出来るようになりました。自分自身びっくりすることですが、今まで何十年も今の土地に住んでいてほとんど話したことがない近所の人と

話すようになり、その方が子供と遊んでくれたり一緒に作業をしてくれたり、自粛中に得たそのような時間や近所の方との関係はとても大切なお金には変えられない貴重なことでした。

買い物を控え物を簡単に買うことが出来ないので、今ある物で何かを作ろう、工夫しようと子供が想像力を使うようになりました。給食がない分、食費は少し増えたようですが、その他の消費は減ったので仕事が減ってもさほど困らなくなり、時間と心の余裕が出来ました。子供は本来の笑顔が戻り家の手伝いを喜んでするようになりました。言うなれば、いいこと尽くしです。確かに一緒にいる時間が長いと兄弟喧嘩が毎日のようにあって、それを見ているだけでついつい強く怒ってしまうことも多々あるけれど、家族でこんなにゆっくり過ごせるのは限りのある今だけなんだ、この時間を大事にしようと自分に言い聞かせると、頭ごなしに怒るのではなく、どういう風に話したらいいかと対応を変えてみたりして、いい勉強をさせてもらっていると感じます。

このように、今回コロナで生活スタイルが変わったことで、現代社会の便利さと引き換えに犠牲になっている様々なことに気づきました。その反面、今まで普通に会っていた人達の笑顔や世の中の活気も恋しくなり、今までの当たり前だと思っていた生活のありがたみを感じました。世の中の危機状況でも、目立った暴動が起きることはなく、マスクを奪い合うことはせず、自分たちでマスクを手作りしたり自粛生活を出来るだけ快適にしようと様々な活動をしている方々、寄付金を集めている方々・・・とても心が温まりますし日本の良さを感じます。

５　月末現在、感染者が減少し多くの都道府県で緊急事態宣言の解除がされて緊張が緩んできているようですが、一人でも多くの感染者を出さぬよう大切な命を守っていきたいと思います。そして、今回の自粛生活で得た貴重な経験を心の財産として、理想の社会について考えていきたいです。　（2020 年 5 月）

キーワードはインフォメーション

杉沢　正子

事務局長の戸恒氏と話していたら、「加須市内のある小学校では、四分の一がひとり親家庭の子どもという学級もあるんだって」と言う。「20 年前にイギリスに研修に行ったときに同じ話を聞いたよ」と話した。私の拙い視察研修の一端を記してみる。

イギリスのひとり親家庭支援

訪ねたのは 1997 年秋、ロンドンにある、ひとり親とその子どものための会「ジンジャーブレッド」の本部事務所だ。当時、イギリスの 18 歳以下の子どものうち 24%、290 万人がひとり親のもとで育っていると聞いて、私は耳を疑った。

「ジンジャーブレッド」は、1971 年に設立され、当時国内に約 200 の支部があった。有給職員は本部の８名のみで、他はすべてボランティアで運営されている。日本円で約 7,000 万円の予算で様々なプログラムが組まれ、ひとり親家庭を支援していた。再就職に向けたトレーニングや子どもたちへの援助活動（キャンプなど）が人気だそうだ。ジンジャーブレッドは生姜入りのビスケットでイギリスではごく一般的な子どものおやつだ。何の気負いもなく、ありふれた日常のなかにひとり親家庭の支援があることを象徴している会の名前だったのだ。

女性 2000 年会議で示された家族の多様性

その３年後、女性 2000 年会議派遣団に参加した。ニューヨーク国連特別総会本会議で代表ステートメントを傍聴し、日本政府代表団による概要説明会に出席した。会議は 6 月 5 日～9 日までの予定だったが、協議が難航し 10 日まで延長した。

合意成立が難しかったパラグラフのひとつが家族の多様性だった。離婚や同性愛などにも寛容で家族の定義を拡大して表記するよう主張する国々に、伝統的な価値観を重んずるバチカン、イスラム諸国が強力に反対した。結局、様々な形態の家族という考え方が盛り込まれて合意することができた。多様な形の家族が幸せに暮らす権利を持つことを、世界に向けて発信する女性 2000 年会議になった。

デンマークの充実した育児、教育、医療制度

デンマークを訪ねたのは 2005 年２月だった。出生率が上昇している秘密は、行き届いた社会保障制度にあると確信した。当時の出生率は 1,7 人を超えていたが、医療費、教育費は殆ど国が負担するので、子どもの数が一種のステータスになっていると聞かされた。社会的に安定して 30 歳代で出産する人が多いという。医療制度も充実しており、各家庭がそれぞれにホームドクターを持つことが義務づけられていた。

ノルウェーで学んだことから

オスロにある男女平等センターの副館長さんの言葉が強く残っている。「平等な社会を推進するために最も大切なのは情報提供です。情報を得た市民は自ら考えて自分の意見をしっかり持ち、社会の問題に常に関心を持って行動します。」というのだ。

「日本人は物質的には豊かです。しかし弱い人や貧しい人に無関心です」これは来日した時のマザーテレサの言葉だが、本当は日本人は優しく心豊かな国民だと思う。関心を持つために十分な情報が提供されていないだけではないのか。

加須市の小学校の現実を知らされた戸恒氏は、居てもたってもいられずお弁当作戦に奔走している。頭が下がるけれど、ストレスが溜まるのか、なかなか禁煙してくれないのが心配だ。喫煙者に関する健康被害の情報も提供しなければならないかな。

「コロナ禍での羽生の杜」

田村　信征

「ウイルスはものを考えない。起こっているのはただの自然現象である（中略）誰にでも、いつでも、会いたい相手がたくさんいる。それを奪われることの苦悩が黒い染みのように世界に広がっている」と作家池澤夏樹が書いていた。そうなのです。確かに私どもはウイルス禍がこの世界にもたらすであろう出来事が私たちの想像を超えて脅威として迫ってくるのを実感している日々があります。まさに嘗てガルブレイスが予見した「不確実性の時代」に突入したと言えるのではないでしょうか。

昨年１月以来、羽生の杜は子ども食堂（後に「みんなの食堂」に名称変更）を実施してきました。月に一度の食堂に集まる子どもたちや親御さんたちの笑顔とボランティアさんたちの応援、食材を提供くださる志のある方など多くの方々の関わりのなかで、水平的な互助のあり方を実現できたことは私にとって貴重な経験になりました。「助ける」、「助けられる」という関係は行政と住民の垂直な関係です。もっと行政には困っている方へセイフティーネットの手を厚く広くやってもらいたいところですが、実際の行政システムは縦割りで、例えば生活保護は福祉課で、ひとり親家庭は子育て支援課という具合に、横断的に課題解決をするような仕組みに程遠い構造になっているのです。つまるところ多くの民間の NPO や団体がその穴埋めをしているのが実情です。

「みんなの食堂」は家族単位での食卓とは違いたくさんのいろいろな状況におかれている方々が集います。羽生の杜が「みんなの食堂」と銘打っているのは孤食の高齢者や外国人家族の方にも来ていただきたいという思いから、殊更に「みんな」という名称にこだわりました。「食事」を必要としている度合いは「経済的お困り」の度合いと必ずしもイコールとは言えません。「みんなの食堂」は様々な立場のそれぞれの必要に応えていきたいという思いが強くあってのことでした。実は、その実践からさらに深刻な課題に直面したことも事実です。「きょう」の食事に困っている方々が現にそこに居るという現実です。同時期にたまたま、子ども食堂の繋がりのなかから「フードパントリー」を知るに至り、県主催のフォーラムや実際の現場を見学しお手伝いさせていただくなかで、羽生の杜としてこの課題に取り組む決断に至ったのです。

早速、行政との交渉に入ります。行政の窓口は社会福祉協議会と子育て支援課ですが、当初行政サイドは「フードパントリー」という活動についての認識はほとんど希薄で、手持ちの資料や他市の事例などを持参して羽生市での実現をアピールしました。

ひとり親世帯の情報は市当局の占有ですから行政とのネゴシエーションはどうしても必要になります。何度かの打ち合わせの結果、羽生市、教育委員会、社会福祉協議会の後援を得ることができ 6 月 20 日より偶数月の第 3 土曜日に実施することになりました。子育てのひとり親家庭に対し行政文書を送信する際に「羽生の杜・フードパントリー」のチラシを同梱して案内することになったのです。3 月末に発送された行政からの文書は 4 月早々に各家庭が受け取りますが、4 月の頭から続々と申し込みが殺到してくるスピードに驚きました。4 月の半ばで 35 世帯を超える申し込みがあ

り、6 月 20 日まで待機していただくので良いのであろうかと急き立てられる思いに駆られました。

ある親御さんから申し込み用紙に同封されて以下の手紙をいただきました。

「扶養手当と一緒に入っていて早速申し込みさせて頂きました。とても複雑な気持ちですが良いのか？どうなのか？とても心配ですが、少しでも助けて頂けると思い申し込みさせて頂きました。よろしくお願いいたします。今、コロナの影響で子供達も家に居ていつもより食事が、トイレットペーパーなどが倍かかっている現状でとてもキツイです。どんなにがんばって仕事しても増える事もなく、自分なりに節約していますが、やっぱり人数もいて大変です」（原文のまま）このご家族は本人、お子さん 4 人、おばあちゃんの 6 人家族です。他にも数通のメモや手紙からパントリーに期待されていることが書かれており、私としては 6 月 20 日があまりにも先の長い待機時間であることに焦りを覚えたのです。時を同じくして、各子ども食堂はコロナ禍で「食堂」を開催するのが難しくなり、お弁当の手渡しやプチ・パントリーの実施に切り替える所が増える状況に応じて、埼玉子ども食堂ネットワークが主導してプチ・パントリーのための食材を供給する機会を提供してくださいました。このチャンスに乗じて 4 月 12 日を皮切りに 4 回のプチ・パントリーを実施することができました。

パントリーの申込は 5 月の半ばで 50 世帯を超えて申し込みが続いているのです。私どもとしては羽生の杜のインフラや人的資源からして 50 世帯が最適と判断していたわけですが、それをはるかに超える申し込みが続いていることに戸惑うばかりかお断りすることの申し訳なさに押しつぶされる思いです。羽生市の人口は約 5 万 5 千人ですがひとり親家庭は 400 世帯あり、それに対して 50 世帯のみへの対応では到底間に合うはずがありません。この現実にどのように向き合うのか、もはや私ども NPO 法人の対応の問題ではないのです。子どもの貧困が 7 人に一人の割合で存在する現実をどのように考えるのか、もはや政治の最重要課題の一つではないでしょうか。1947 年東京生まれでシカゴ大学東アジア学科のノーマ・フィールド教授は「解放の神学者」レオナルド・ボフの言葉を引用して「『貧困の反対は富ではなく、正義だ』。実在する富を公平に再分配すれば事足りる、と考える人が多いかもしれません。（中略）しかし、それだけでは貧困の克服を意味しません。それには本質的な価値観の転換とそれに基づいた基盤が必要ではないか」と問いかけています。パントリー活動を契機に「健康で文化的な最低限の生活」の権利はいかに保証されるのかと問われているように思うのです。

コロナ禍の中で考え、行動したこと

戸恒　和夫

１、僕のコロナ日記

「皆さんが動きやすいように…」と気を配り、日がな一日ウンウンうなりつつ文書やなんやらの書き物をする。ハラハラしながら、打開すべく電話する用事も少なくない。倦んだり行き詰ったリする度、換気扇の下に行きタバコに火をつけ、ホッとする間もなく続きに戻りたくなって、あと２～３服を深吸して机に戻り…。こんなくり返しでやって来たのが自分のスタイルかな。喉を傷めしょっちゅうセキをするけれど、人より少し位つらい思いをしたり、疲れたり、時に叱られたりしても頑張って来られたのは、５０年にもなるたばことの付き合いのお陰もあってのことだと、こっそり思っている。

そんな僕が（疲れがたまっているな…と感じた）３月末に、３～４日風邪気味となり、忘れもしない３月３０日、体温が３８℃を記録した。すでに「３７．５度、４日間」が広範に行き届いていた中、家人に「セキが気になる」と医者に行かされ、レントゲンやらＣＴスキャンやらで６回も通院した。医師によると、ＰＣＲ検査とやらは「この程度の症状では保健所が相手にしない」とのこと。以来２ヵ月以上たっても「証明する手立て」のないまま、行く先々で「また出歩いてるの！」「ほら、入ってくるんじゃない」「またセキしてる」「齢を考えなさいよ」と指をさされる生活が続いた。

たまに「えらいね。大丈夫？」と言ってくれる人もいないではないが、２月して医師が「もう、大丈夫でしょうよ」と言ってからも、周囲の受け止めがすぐに変わるはずもなかった。

もちろん、お年寄りや、病気を経験した方の、そしてその周囲の方の心配もわかる。感染した途端、あっという間に重症化し、亡くなってしまわれる方の報道も重なって、「注意はしてるから、自分は大丈夫」「どうなっても覚悟はしているさ」「時々東京にも行くよ」という僕のような人が一番警戒される人物なのだ。役所に勤める方が「この時期、うっかり他所でお会いして、感染者になったら、役所の業務全体がストップしてしまうので」と、おっしゃるのも、ただのいい訳でなく、深刻な事態を物語っている―そう納得するしかない。丸太小屋の仲間で通所施設に娘を通わせている母親も、「いま、うっかり熱でも出したら、１～２ヵ月、娘が通う場所がなくなっちゃうのよ…」とぼやく。会う人ごとに出したりひっこめたり、一貫しない自分の生活信条ではあるが、やまれぬ思いもあり、そうするしかないと思い定めての生活が続いた。

しかし、信じられないことだが、この間に世間では、マスクをしていない人が電車のなかで罵倒されたり、営業を続けるパチンコ屋さんが、マスコミにまで非難されたりと、自警警察？とか？戦時中と変わらないような野蛮な正義の、居丈高な押し付けムードが高まってしまったというのは、つくづくいやなことだ。「せめて、自分の周りではそんなことはさせないぞ」と気構えて来たし、幸い僕の町の身の回りではそれ程のこともなく、過ぎて来た。（電車にも乗らないのだから、当たり前かもしれないが…。）

２、弁当配達のプロジェクト

だからと言って、日々成長する子どもらをあっさりと学校から締め出して、家の中に閉じ込めていることが、なぜ「正しい」のかは、あの人の突然の「要望」から始まって一方的に「上から下へ」（僕に言わせれば下から上にと表現すべきだが）決められてしまった過程共々、許せない思いを引きずっている。だが、「このやまれぬ思いを、立場の違う人とも、どれだけ共有して広げていけるか」と考えるところから、動きは始まった。

３月２日に冬休みを前倒しして、臨時休校となり、時を待たずして公民館、図書館等々公共施設が一斉に閉鎖されたのは、御他聞にもれず加須市も同じだった。公共施設頼りで続けてきたあそびひろばや小中高生勉強会の活動も開催できなくなった。「こんな時にこそ頑張らなかったら、子ども食堂は意味がない！何か出来ることは？」と皆で考え、まずは今の生活の様子を知りたいということで、初めてのことだったが、すくすく広場に参加する保護者に郵送によるアンケートを実施した。同時にこの中で目を皿のようにして新聞やＷＥＢニュースで探したのは、市や町で何とか授業や給食を継続している所はないかとの情報だった。埼玉県内の一例をあげれば、吉川市が学童クラブ向けのお弁当配給を継続していたことが大きな希望だった。

それというのも、給食がなくなったことで、お昼ごはんをどうするか、途方に暮れる子たちもいるはずで、しかも町なかには、ものの見事に子どもたちの姿が消えている。「先生の言いつけをこんなに守る子たちなのか」と驚くほどだった。きょうだいだけで日中を過ごすストレスも計り知れず、「家を締め切り、『ピンポンが鳴るとどうしていいかわかんない』と怯えている」とも聞く。そこで「これまで築いて来た子ども食堂のルートはもちろんだが、この機会に学校との連携を試さなければ、進歩がない」とお弁当配布の計画を立てた。この頃から「ピンチはチャンス！」の合言葉が出来たように思う。

活動の幅を広げる意味で、他の市民団体との連携のチャンスととらえ、子育て支援課の計らいで給食センターに食材をいただきに行った際にお会いした石井喜久子さんたち尊敬する先輩らの『しずくの会』に相談した。２つ返事でＯＫとなり、加須社協にも協力をいただいてあけぼの園の調理室で、週２回３０食のお弁当配布が３月２４日から始まった。すくすくからは、鈴木さん、浦部さん、中島さん、天野さん、丸山さんが調理に、庭山さん、林さん、戸恒が配達に入って、しずくの会のメンバーの手慣れた段取りに学びつつ頑張った。

資金は、真如苑さんやベルーナさん、赤い羽根募金さんの緊急支援で賄えた。

配達先も、従来のルートだけでなく、いくつかの小学校を手分けして訪問し、校長先生の判断で担任が気がかりな何軒かにチラシを届けていただき、申し込みのあった家庭を対象にすることにした。戸恒、庭山、赤嶺、杉沢が訪問し、内２校で計３０食の配達が決まった。

ある校長先生は「校長仲間にも、いろいろ言う人はいる。あんたのとこだけでやって、何か言われたら、どうする？何かあった時に責任はとれるのか？公平性の面でも

問題はないか？などなど。やる気のない人に限ってそうなんだ。でも私は腹をくくったので、お願いします。腹すかして、家の中に閉じこもっている子どもらのことは、放っておけないです」と言ってくれて、スタッフの意気は上がった。

この後、１ヵ月して調理場も閉鎖となり、最後の１回を石井さん宅でやった後、この事業も中断された。でも、この時、南町で活動するつくしの家の吉田夫妻が、「人数が集まって調理するのが問題なら、私の家でやればできる。週２回で１５食だ２０食だは苦にならないし、楽しめるよ」と言ってくれて、翌日には４～５回分のメニューを届けてくれ、有り難いことに、学校再開の６月までの２ヵ月間を、継続出来ることになった。

この時思ったのは、「何が起きても何とか対応は出来るものだ」「こうなると小さい単位で動くことのほうが強いこともあるんだ」ということ。これまで頑張って来たあそびひろば子ども食堂の実践をもとに、今後どう展開していくかのヒントをつかめた気がした。

何はともあれ学校というものが、子どもたちにとって欠かせない大切な居場所であり、もっと言えば、給食は、とてもとても大事な役目を負っているのだということを、この期間ほど痛切に感じたことはない。そして何より「いる**はず**」としか言えてなかった子どもたちと間接的ながら、つながりが持てたことは、「やってみてわかった」大切なことだと思った。少し前だったら、「７人に１人って何それ？」「喰うのに困ってるって、今時、そんなに貧困な家庭ってあるのか？」「虐待っていうけど、ある程度怒鳴ったりたたいたりってことは、普通の家庭でもあることだよな」などと返されることが多く、しかも空ろな理屈？で返すしかなかったのが、実感を伴って語れ、共有できる様になったのは、並行して行ったプチパントリーでの経験と共に、私たちにとってかけがえのない大きなことだった。

給食のない時のお昼ごはん。コンビニ弁当はいい方で、与えられたお金で、結局スナックとドリンクを買いこみ、ポリポリ・ゴックンで済ませてしまう―そういう実態をしっかり見据えた時、「飢えている訳ではない！生活スタイルと好みの問題さ」でかたづけてしまうような人を、少なくとも政治家や教育者には選んではいけないと、思い決めた。

３、ゼロから頑張ったプチパントリー

並行して６回のプチパントリーを行った。この時期に学校給食が止まってしまった中で、給食センターや納入業者が抱え込んだ食品を提供したいという意向を受け止め、埼玉県子ども食堂ネットワーク代表の本間香さんらが呼びかけて実施したプロジェクトだ。約３ヵ月間に６回実施され現在も継続している。県の強力なバックアップもあってのことだが、でもこれは全く零からのスタートで、場所も手段も設備も組織も予算もない状態から、多くの子ども食堂が一心に協力し合って作り上げたものである。

最盛期の６月初めには２トントラック数台分、１０数トンの食品が１日のうちに集積され分配され、県内１３のエリアごとの第２段ステーションに配送される。とはい

ってもこれはすべてボランティアによる手作業で、我が加須ステーションは加須・羽生・行田・久喜・幸手の北埼５市の分を任され、午後から８つの子ども食堂に分けて、その日のうちに持ち帰ったそれぞれが２０数軒に小分けして夕方には配布を終える―という忙しさだ。米や麺類、レトルト食品など、常温保管できるものは扱いやすいが、５～６割程度が冷凍食品のため、一刻も早く冷蔵し、各家庭で消費を始めてもらわなければならない事情があって、気がせかされる。冷凍庫が圧倒的に不足するため、県が緊急に手当てしてくれはしたが十分でなく、加須でも、鈴木さん宅、吉田さん宅、愛泉寮などの手を煩わせて、自転車操業が続いた。それでも、「条件が悪いから事故が起きてしまった―という言い訳はできない！」という覚悟は不思議なほどにボランティア全員に浸透していて、いきおい作業中には厳しい声が飛び交うようなことにもなったが、それでも欠けることなく毎回メンバーがそろっただけでなく、各市からくるメンバーも回を追うごとに互いをカバーしあい積極的に配送段階からを担ってくれるようになった。

これというのも、すべてを担い、運営する本間代表やその周囲の皆さんが、すさまじい重圧を受け止めつつも、どの地域に対しても公平に心配りをし、細かいところにまでも配慮した計画をしてくれることに、全員が感嘆し、共鳴し、励まされてのことだったろうと思う。いい加減？高齢な方たちが「絶対に失敗しない。少しでもプロジェクト全体の力になろう」と皆で感じ合っていた感じがする。

騎西地域を担当した庭山さんは、ある１１人の大家族と知り合うことができ、その活力を感じつつ、「毎回飛び上がって喜んでくれることが嬉しくて」と語ってくれたが、それも出会うことから生まれた、この活動への確信なのだと思える。ある人は「一人の音楽家が活動の機会を失い、収入がまったくなくなって困っている。ルートにのせてもらえないか」と提案したが、こうしてひとつずつ目に見える確実なつながりが増えていき、そのことに励まされつつ頑張って来られたということが、このプチパントリーのかけがえのない成果なのだろう。すくすくの関係では、にほんごの会、騎西ルート、すくすくアンケート由来ルート、北小浜ルートで３１まで増えたほか、つくしの家がコンスタントに２５軒分を頑張ってくれて、頭が下がった。

このようなプロジェクトは、無言のままでも行政にインパクトを与える。市役所のフードドライブや子育て応援団体の交流会開催などがあるが、この先にも予想される臨時休校などに向け、給食や学校を続ける方法が、今こそ研究されなくてはならない。同時代に生きる者たちが、皆、それぞれの場で知恵を絞り、汗をかき、重責を分け合い、何とか子どもたちに伝えるものを中断せずに紡ぎだしていく営みこそが大切で、またもや「ある人」の一言で「上にならえ！」的な愚を繰り返し、「これが正しい」的な理屈を並べることに腐心するだけではならないだろう。

４、かぞグルみおべんとプロジェクト

それにしても、我々がなしえることというのは、微々たるものでしかない。もっと町中に広げていくことはできないか？

我々の活動の中から湧き出てくるこのような思いというのは、自分たちだけのはずがなく、本来誰もが共通に持っているものだと思う。ただそれを表面に出して横につなげるためには、それなりの工夫と努力が必要なのだと思う。

そこで、２ヵ月ほどの準備期間を経て、７月から、「かぞグルみ**おべんと**プロジェクト」を動かすことにした。子ども食堂応援隊の関根由紀さんが、「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」のコロナ対策緊急支援基金に気付いて、これに市内で佐伯さんが「カゾテクＨＰ」を立ち上げておられることを結び付けてくれたアイデアから始まったが、町なかの飲食店さんがお弁当販売で頑張りぬくと同時に、町ぐるみで子育て家庭の力になるという旗を掲げることが出来たら―という着想だ。

４～５０万円の資金でおべんと券を発行し、協力店で使えるようにする。でも、これが支援を必要とするひとり親家庭に確実に届くというシステムをどのように迅速に作れるかが、全国どこでもネックとなっている課題だが、加須にはすでに活動している２つの子育て応援パントリーがあり、そこには１３０家庭以上が登録してくれていて、すぐにも配布が可能だ。こんなに条件の整った町（市）はそうはないはず。こうした確信から申請を始めたが、このプロジェクト案には加須市の子育て支援課や加須市社協も「いいアイデアだ」と当初から関心を示してくれた。１回目が不採択になったむすびえに変わって市が補助金を出すという動きにもなりかかったが、そうこうするうちに、加須市が絆券という地域通貨を使った市独自の子育て支援緊急プロジェクトを総額１億５６００万円を投じて実施することになり、一気に、願ってもない環境が整った。ただし一過性のものであってはならないという観点では、我々のおべんとプロジェクトを実現する必要性は変わらない―との判断で、２度目のむすびえへの申請をし、実現できた経過がある。

現在スタッフが手分けして協力店を探すための飲食店訪問を始めているが、反応はすこぶる良い。コロナ禍以前とは大違いで、子育て家庭を町ぐるみで応援していく雰囲気は高まっていると思う。

今後も継続して協力店が子育て応援の旗を掲げ続けてくれることが、夏休み、冬休みなど、給食が休みになる期間のために欠かせないとの趣旨で、訪問を契機につながりを持ち続けたいと念じている。こうした先に、お店が子ども食堂になってくれる可能性も出てくるのではないか―と願っている。加須市での子ども食堂フォーラムもそのうち必要かな？

５、終わりに

この期間、多くの方々に「忙しい思いをさせた」という反省はあるが、僕自身、皆さんとぜひとも共有したい大切な気づきがあった。

それは、お弁当配りを頑張っていたある夫婦に、ある家庭から「このところパパが荒れてしまって、家にいられない」と相談があり、市の相談室や警察とも相談して、「しばらくこちらで過ごしてもらった」後、いまは元の生活に戻れて、「夫婦ともアドバイスを受け入れながら生活を続けている」とのこと。

このことで気付いて、思うのは、「周囲に何かと心配されてきていた親子だが、口出しは出来なかった。子ども食堂での２年半もの関係があってはじめて、相談相手に選ばれたのだなあ…」ということ。昨年の講演会で、愛沢隆一講師は次のように締めくくった。

子ども食堂は、支援の入り口になる。　大変な状況が見えてくる。すくすく広場の学習支援は、子どもと家族が地域とかかわっていく中でそういう活動をしている。市民との交流、関係機関との交流が、子どもや家族を守るしくみと提言していく。運動を担っていく。

―子ども食堂には大きな意味があると思ってきたが、それには「続けること」が大切だということを、改めて思った。（了）

プチパントリーのお手伝いを体験して

中島　君子

新型コロナウイルスの流行が、日に日に拡大し、緊急事態宣言が発出された時には、どちらのお宅でも、さまざまな不自由と困難を強いられた事と思います。

３月から全学校の休校措置が取られ、給食がなくなったことにより、「すくすく」では、昼食の準備が大変な家庭に希望を募って、お弁当の配食サービスを１ヵ月に都合５回行いました。その際、調理補助としてお手伝いさせていただきました。

戸恒事務局長と庭山さんが配達して回って、炊き立てのご飯と、何種類ものおかずの入ったお弁当が届いた時の子どもたちの喜びようを、あとで伺って、その喜んだ様子が目に浮かぶようにこちらも嬉しくなったのは、ついこの間の事でした。

その後、調理場として使わせていただいていた「あけぼの園」が使用できなくなり、残念に思っていた矢先に、「にほんごの会」の河野さんより連絡があり、給食用食材が子ども食堂ネットワークに大量に寄付され、ひとり親家庭のお宅など、その食材を活用してもらえる家庭を探しているとの連絡をいただきました。

早速頭に浮かんだのは、私の所属する団体の、「新日本婦人の会」のメンバーの中に、３人の子育てに奮闘している若いママがいたことでした。連絡を取ってみると、「喜んで食材を頂戴したい」とのお返事がありました。また、そのお友達のママ（３人の子を持つひとり親家庭）も希望し、この２軒のお宅が、今回の活動を意義あるものにしてくださったのです。

「新日本婦人の会」は、女性と子供達の幸せをスローガンとする婦人団体であり、会員である私が、子ども食堂のお手伝いをしているのを知って、バザーの売上金などをこども食堂に寄付してくださっています。助けられたり助けたり、これもご縁かと、うれしく思っています。

最初は、河野さんが仕分けた食材を受け取り、相手方に引き渡すだけでしたが、冷凍品が多く、解凍させないようにしなければなりません。保管場所がない。量が多い。家庭の冷蔵庫では保管しきれないなど問題点もありますが、「食べ盛りの子供が３人もいると、たくさん頂戴できることは有難い」と、仲介役にはうれしい言葉を頂きます。

こんなこともありました。冷凍食品の配分に手を焼いた河野さんより「助っ人」の依頼があり、伺ってみると、何キロもある食材の塊と格闘していました。凍ったままでは分けられないのです。こんなに苦労してやってくださっていたんだと思うと申し訳なく、その次からは、初めからお手伝いをすることとしました。

会場の「羽生の杜」には、食材の段ボールの山がいっぱい。ここまでここへ運び込むのも大変な重労働です。これもまた、どなたかがやってくれているわけです。腰をかばいながら、仕分けのお手伝いをこなし、それをまた仕分ける。個々のお宅に配達できるようになったのは、4 時過ぎ。約束の時間に間に合わせようと車を走らせる。でも、「あのお肉美味しかったです。有難うございます。」などの言葉をいただくと、疲れを忘れる。他の関係の皆さんも同じだろうな、と思いました。

世界の食料問題に比べると、贅沢すぎる程に恵まれた日本。でも、天候不順や食料自給率・担い手の高齢化・廃棄食糧・添加物などの問題をいっぱい抱えており、いつ食料危機に陥ってもおかしくない状況にあることも、しっかりと子どもたちに伝えておかなければいけないと、つくづく思う日々。子ども食堂でも、機会があればお話し会をしていただけたらと思います。

今回の「プチパントリー」は、大きな意義のある活動になり、参加できてとても良かったと思っています。有難うございました。

おしゃべりしながら

信田　めぐみ

ご縁があって北小浜の子ども食堂に昨年 11 月から参加させてもらってます。

ここに 来る 子供達は ほとんどが 女の子の１２～３人です。この子達が、毎回 、料理を手伝いたいと言ってきます。デザートならば―と、材料を切ったり混ぜたりしながら、姉妹の話をしてくれます。 そして、回を重ねるごとに、近所のおばちゃんだと慕われたいと思ってます。

また、スタッフのなかで、てんとう虫の会の方が、その都度あたたかい手料理を

持って来てくれます。おかげでご馳走が、さらにパワーアップです。今後は、てんとう虫の会の方から昔遊びが習えたらなぁと―思ってます。
　あと希望として、パパ・ママたちにも、時々覗きにきて欲しいなぁと思います。
以上です　　m(_ _)m

友人に誘われて参加しました

新井　孝代

　子ども食堂のことは何も知らずに、料理の手伝いをしています。すこしずつ、活動内容がわかるようになりました。
　今は、三俣地域を主に手伝っています。人数が少ないので、子どもたちと触れ合う機会が多く、会えるのが楽しくなりました。
　また、子どもの持つパワーやエネルギーをもらって、元気にもなれます。これからも、気負わず、気長に続けていきたいと思っています。

先輩たちの背中を追って

猪口りい子

　コロナ騒ぎの少し前、私は子どもの貧困問題が知りたくて子ども食堂に飛び込んでしまいました。入ったものの、私に何が出来るんだろう？と考えていると、世の中はコロナ一色となってしまいました。
　テレビからは毎日コロナ関連の話題ばかり、感染者や死亡者、休業による収入減、コロナ倒産、家賃が払えない大人たちの話題、子どもの貧困が増大する想像が用意にできてしまいました。
　さらに混乱する世の中に、コロナ感染者や医療従事者やその家族までも、いじめや偏見が発生しています。
　そんな中、自粛されていた子ども食堂再開のお知らせが入って来ました。
　いろんな方の顔が浮かびます。皆さん時折笑いながらも黙々と仕事をされ、反省会でもさらに子どもたちに対する愛が溢れています。
　子どもたちの笑顔が見られたら本当に嬉しいです。
　何も出来ませんが、皆さんの背中を追って行きたいと思います。

子どもたちの笑顔と歓声にふれて

増田　雄一

定年退職をして、丸山先生からのお誘いがあり、「すくすく広場」に参加することになりました。子どもたちの生き生きとした活動や歓声、保護者の賑やかなおしゃべりなど、これまでの職場とは少し異なった新鮮な営みを垣間見ることができました。

ボランティア活動への参加は初めてで、どのようにお手伝いしていくことがより良いかを考えながら、自分ができることを進めてきました。あまり積極的な行動にはなりませんでしたが、そのような中で子どもたちや保護者の笑顔にふれることができて良かったです。また、スタッフの皆さん一人一人が、子どもたちや保護者の様子を確認しながら、親身になって取り組む姿に感動しました。

スタッフの皆さんが活動の目的や信念をもち、役割分担に従って協力して進めていく中で、僕自身も楽しみながら、少しでもお手伝いができるようになっていければと思っています。

現在の仕事と「すくすく広場」の活動は、多くのことが関連しています。今後の活動に相互の活動が生かせていければと思っています。

新型コロナウイルスのため、今年度は本格的な活動がまだできませんが、動向を見極めながら、再開に向けたお手伝いしていきたいと思います。

子どもたちの笑顔と歓声が早く戻ってくることを願っています。

味方であり続けること

林　　実

「北小浜みんなで子ども食堂」は、今年初めに「埼玉県子ども食堂ネットワーク」に加入し、5 月にはネットワークから、「JAIFA 子ども基金」からの 5 万円の助成金をいただきました。これは「すくすく広場」の口座に入金してもらいました。そして、すくすくの新しい予算項目として北小浜の 5 万円が加わりました。

去年の 8 月に北小浜の子ども食堂が始まった当初、ネットワークからカレー皿やサラダボウルなどの食器セットを 25 組ほどいただきました。これは今でも大切に使っていますが、これをいただいた時は「もう後に引けないな」と思ったものです。少し脱線しますが、ネットワーク代表の本間香さんには何度かお会いする機会がありまして、その度にこの人は「アラレちゃん」（鳥山明「Dr.スランプ」少年ジャンプ）のような方だなと思いました。トンボメガネの小柄な方ですが、決断が早くパワフルで、何事も自分から実行します。埼玉ネットワークのまとまりは、この人なくしてはありえないという感じがします。

さて、北小浜の子ども食堂は、団地内の「てんとうむしの会」の方々という、小さいけれど強力な支持を得て、さらに強力なボランティアスタッフが加わることで、団地内に定着してきたと思います。

今年のコロナ禍で、学校の長期休校という未曽有の事態の中、北小浜で子ども食堂が開けたのは 2 月までで、3 月にはお弁当配布に切り替えました。4 月に緊急事態宣言が出る状況で、その後の子ども食堂は中止となりましたが、6 月 27 日のお弁当配布からの再開を準備しています。

子ども食堂が中断している間、埼玉ネットワークや加須給食センターなどの協力を得て、子ども食堂に参加している子どもたちの家庭に食材やお菓子を届ける、プチパントリーを合計 7 回にわたって実施しました。プチパントリーは 6 月 26 日にも実施する予定で、ネットワークの本間さんによれば、これからも継続するということです。

月に 1 回しか開けない子ども食堂が、子育て家族にどれほどの力になれるのか、自問自答するときもありますが、私たちが子育て家族の味方であり続けることが、地域のセイフティネットの一環として、少なからぬ役割を果たすことができているのではないかと思うこともあります。

子どもを真ん中にした地域コミュニティー：すくすく広場

丸山　綱男

すくすく広場の上にも 3 年？　格言で「石の上にも 3 年」とは、ご存じの通り、つらいことでもあきらめずに続ければ成果が得られるという意味ですが。

すくすく広場の上にも 3 年は、活動に参加された方々、運営に携わるスタッフ等と忍耐強く広場を進めてきた結果、成果が得られたというより、子どもが真ん中の「子縁社会」を築き上げて 3 年という意味合いがあるように思います。

広場に参加いただいた皆様の縁で 3 年が過ぎ、4 年目の活動を始めた矢先に新型コロナウィルスによる活動全面中止を余儀なくされ、“子どもを真ん中”には実現していません。ここで昨年から本年初めにかけた子育てに関する我がアラカルトをいくつか紹介してみたいと思います。

1　落合論文：日本はなぜ子育てが世界一難しい国になったか？

この論文を発表した方は、家族社会学 落合恵美子京都大学教授です。教授は海外で子育てに関して調査した結果が日本と大きな違いがあることを紹介しています。「日本では子育てに専念している母親が孤立感と重圧で苦しんでいると説明しても、育児と仕事の両立で忙しくて悩んでいる例はあるけれど、子育てだけをしていて苦しいなんて聞いたことがない、という反応しか返ってこない。アメリカでも、ヨーロッパでもそうだった。東アジアや東南アジアの国々でも。」教授は、子育ては楽しいはずが“子育ては大変だ”とここまで思い詰めているのは日本だけじゃないか、と常識を疑ったという。

教授は、「育児不安に陥ったのは、社会的ネットワークを失い、孤立した母親

たちだった。昔も今も、家族だけで立派に子どもを育てられた時代など、無かったのだ。ましてや母親だけの『ワンオペ育児』なんて、できるわけがない。」との見解に至ったそうだ。紙幅の関係で詳細は述べられないが、「育児ネットワークの再編成がうまくいかず、十分な育児サポートを得られない孤立育児が増えてしまったというのが、日本の子育てが大変になった原因であることが見えてくる。」と現時点での結論にされている。ご家庭によってそれぞれ内容の異なる“子育ては大変なのよ”が時々漏れ聞こえてくることは確かと思います。

すくすく広場は、地域コミュニティーの中で安心して暮らせる基盤づくりに寄与することを旨としており、教授の言われる「育児ネットワーク」を大切な柱として、今後も深めて、広げていきたい。

２ 子どもの「今」は社会の「未来」であるはずだが

新型コロナウィルス問題で、子どもたちが家庭で長期間にわたり友だちや地域の方々と触れあうことなく過ごすことを求められ、子どもの「今」が止まってしまいました。子どもの「今」が社会の「未来」ではなくなってしまったのです。

本来なら、子どもたちは、小さな目、小さな耳を一生懸命働かせて柔軟な頭の中は休むことを知らず、納得のいくまで聞き、学んでいく毎日であったはずです。
社会にとって経済的な損失より子どもたちの大きな人生の損失になってしまいました。経済はいつか取り返しがつきますが、子どもたちの今は取り戻せません。

私たち大人はこれから何をすべきか、考えを深めていきたいと思います。作家ヘッセは『春の嵐』の中で“自分のことだけ考えていると孤独になるとして、世界で起きていること、他人のことに関心を持つことの大切さ”を説いています。
どんな苦境にあっても、相手への敬意を忘れない非常時ほど他者に思いを寄せることが大事といいます。日々の不自由さや息苦しさ、厳しさに折り合いがつけられるかもしれません。互いが信じられず、人と人との距離が広がる今、他者を思うことの意味をかみしめたい。

子どの「今」を守るために、大人自身が「強くなければ生きていけない。優しくなければ生きている資格がない（米作家レイモンド）」という自覚を持たなければならないと考えます。すくすく広場としては、子どもを真ん中にした地域コミュニティー作りを一層進めて、どのような危機（今はコロナショック）がこようと「強さ」と「優しさ」を同時に求めて行きたいと考えます。困難に立ち向かう強さに加え、苦しい状況にある人々にお互いに寄り添う優しさが不可欠だと思います。

最後に、3 ヶ月遅れで登校し始めた子どもたちに、“経験したことは変えられないが、その経験は場所を変えれば必ず活かせることがある”ということを伝えたいと思います。今後もすくすく広場を発展させていくために、“あなたが起こしたい変化に、あなた自身がなりなさい”とガンジーに言われている気がしてなりません。

2020 年 6 月 4 日投稿

すくすく広場公開講演会

愛沢 隆一氏 (日本社会福祉司会アドバイザー)

「子どもの虐待対策　児童相談所及び地域の役割」

令和元年　 5 月 26 日(日)
主催　一般社団法人すくすく広場
会場　不動岡公民館

1　プロローグ

私は、児童相談所の経験が長く、大学では福祉。越谷児童相談所では児童福祉司を行っていた。昭和リハビリセンターで、春日部特別養護老人ホームケアマネ。15 年後児童相談所虐待防止相談のポスト。虐待対応の第一線。加須は、馴染みがある。ここは当時埼玉県立青年の家。連休前の新規職員の合宿研修はここだった。最後の四年も加須地区担当。加須、羽生等。当時児童虐待はなかったかというとそうではない。昔の親、自分が食べなくても子育て、今は…などと言う人がいるが、決してそんなことはなかった。戦後の戦災孤児対策から始まっていた。駅の子どもたち。行くところもなく寝泊まり、餓死も大勢いた。里親の虐待子殺し報道されていた。要するに親や社会が追い込まれたときに児童虐待が起きる。

2　お話しする内容

加須に尊敬する先輩鈴木さんがいて、児童福祉で先頭に立っていた。また、成田さんが、実際に仕事を教え込んでくれた。今、初めにということで、児童相談所の役割、どんなところ

か。家庭で暮らせない子どもの社会的擁護の場。市内では、愛泉、光の子供の家。よく無理なお願いをした。虐待の背景。貧困の問題。虐待から子どもを保護することばかりであるが、それは一人ぼっちにすることと非常に近い。そのあとの社会に出てからの生き方が触れられていない。そうならないための支援。家族を守る。虐待は無くならない。地域の役割もある。

3　子ども虐待の基本的理解

基本的な考え方。鬼のような親が子供を殴ったりする。通常では考えられないと、そこだけ強調されるが、実際にはどこの「おうち」でも起こる。家庭が大変な状況になると、子どもを安定して育てられない。子どもに対してきちんとした余力がなくなり、しつけで怒鳴ったり、エスカレートする。そのような、不適切な養育にばかり目が向けられるが、家庭に余裕がなくなった時、虐待が起きてくるものである。深刻な虐待が日常化し、事件になる。家庭という安心で大切な場所で不適切な扱い。心の面でも大きな影響を受ける。その子の一生に大きな面で影響を受ける。そこで、子どもと家族の両方を支援する。虐待をしている親御さんの悲鳴の表れ。人間の子どもは弱いものです。ミルクをあげることから始まって、その結果が今、ここまで成長した姿です。今まで頑張ってきたことに我々の目がいかなくなってしまう。子どもの虐待の対応は、親子分離だけではない。早く発見、再び生活できるように支援。でないと虐待対応対策の意味がない。親が犯罪にならないように、子どもと家族が一緒に生活できるように支援。心と気持ちに寄り添いながら支援。死亡事件が報道される。起きてはならない。児相の不手際。イロハのイの部分が、指摘される。本当に安全を守るというところで疑問が出る。言い訳はできない。児童相談所のスキルは上がっている。私もぶっ殺すとさんざん言われた。怒りもすさまじい。だんだんうろたえなくなってきた。どうやって関係改善をはかっていくか。それが役割である。きちんとした対応が必要。児相だけで虐待を防げない。本当は親の助けを発見したい。地域の中で見つけてくる。

4　児童相談所とは

児童福祉法で都道府県政令市に設置義務。中核市特別区は設置できる。東京で唯一練馬区がまだ。埼玉では越谷、川越等が中核市で、設置を目指すよう指示している。義務化になる動きがあったが、無理だということで努力義務になった。設置をしているのは、金沢、横須賀、兵庫の明石市が中核市規模で設置している。子どもの福祉全般、各職業の中で、医師は必置。戦後の浮浪児、戦災孤児をどうやって守ろうか、児童相談所が中心、安定した生活の場。乱暴な歴史を扱っている番組もあった。戦災孤児対策の初期は、大人に大切に扱って来られなかった。大人を信じない。どうやって保護していくか。社会の中で一番問題になる戦災孤児そして、高度経済成長時のサラ金問題の時の家族等、時代の先端に児童相談所は位置づいてきた。

5　埼玉県内の児童相談所

草加の支所も間もなく相談所に昇格。

6　児童相談所の機能

どのような相談も基本的に出来る。色々な機関ができてきたので、非行も含めて相談できる。まず大変な状況の児童を一時保護所に保護する。 独自に持っている。今は、介護の施設も契約している。そのような措置が残っている。

7 相談の内容
虐待や家庭での生活が無理な場合。障害の判定。非行の相談。13 歳までは、児童相談所が扱う。大きな事件で報道される。一時保護所で他の児童と一緒に生活することが大きな問題。

8 児童相談所対応件数推移
この統計は平成二年からおこなっているが、現在では 133778 件 11 倍に増加している。身体的、ネグレクト、心理的虐待が多い。さらに、家族間暴力。子どもの目の前で父が母に暴力を振るう。心理的な虐待である。夫婦の問題に 110 番通報で警察が駆け付けた際に、子どもがいた。震えていた。心理的虐待で一時保護される仕組みになっている。どんどん増えている。一時保護所での対応が夜中になる。警察からの通告。部屋が無くても場所を作る。年間かなりの数がこのような保護になる。警察事例が一番多い。約半分ある。次いで、学校、近隣知人の順になっているが、連絡が義務化になったからである。

9 児童相談所での児童虐待対応件数
埼玉県では、14079 件どんどん増えている。

10 児童虐待防止策に関する法改正の経緯
虐待防止法は、児相が対応するようになった。「みのもんたの朝の番組」で児童相談所への批判。平成十年ぐらいから、親の意に反しても保護をする。家のカギを壊してでも踏み込んで保護する。様々な権限がある。しかしながら、ただ保護するではなく、親子がきちんと暮らせるようにするという仕組みが大切。

11 児童福祉法、児童虐待防止法改正案の概要
躾のための体罰禁止は、法案になる。ただ、民法の改正に時間がかかる。日本でも親の懲戒権が脅かされて良いのかという問題がある。あと二年間検討する。学校や教委は、児童の秘密を漏らしてはならない。野田の事件では、父親にアンケート内容を伝えた。秘密を守るのは当たり前のこと。そして、子どもの意見表明をできるようにしようという内容。

12 児童虐待による死亡事例の推移
虐待死亡事例がある。毎年ある。減らない。少ない年で 50 人。多い年で 142 人。親子心中は虐待に位置付ける。追い詰められた親子が起こす虐待になる。グラフの青い部分が心中以外になる。望まない妊娠の子ども。ゼロ歳児が五割を占める。生まれたばっかり・・。20%が妊婦検診も受けない。

13　児童福祉司の勤務年数の推移
「児相は何やっていたんだ。」あってはならない。関わっていて、助けられない。児相の動きもシステム。その中で、年 10 件が助けられない。現在の職員構成で、児童相談所の経験年数が若い。一年未満と三年未満で 45%を占める。さらに児童福祉司一万人を一気に増やすということは、経験ない人の割合が増えてくる。

14　児童虐待への対応
一番重要なのは、発生予防である。ここに役割が言われている。家族と子育ての支援、早い段階で対応するという流れである。必要な時に保護する。

15　児童虐待の定義
再発防止のための家族支援プログラムは、努力義務として、どうやって家族に返すかの評価を行う。虐待の定義、四つの分野。保護者が子どもに対して―が原則になる。実母が一番多い。家庭の中で保護者が起こす行為を指す。統計だけではあまり意味がない。父母から子ども、母子にパートナーは保護者ではない。同居人からの暴力行為は、それから守れなかった親のネグレクトに分類される。

16　身体的虐待
身体的虐待は、読んでいても身の毛がよだつ。外傷やあざが多い場合が発見される。ところが、目に見えないところを選んで虐待すると、発見できない。不自然なけがは、説明がおかしい。虐待が判明する。

17　ネグレクト
車の放置も含む。同居人から守れないのもネグレクト。ゴミ屋敷、汚れた洋服。長年専門機関として関わってきた中で、強い介入をする。しかしながら、長期化する。何やっているか子どもは理解できていない。家の様子しか分かっていない。その中で成長すると、親になった時にどうやって行ったらよいのかか゜身につかない。ネグレクトは早期に対処しなければならない。職権保護として、一気に十人を保護したことがあった。ただ生活の改善ができない等、境界線が定めにくい。

18　性的虐待
全体の1パーセントと示されているが、実際にはもっと、多くの数。子どもにわいせつ行為をする。直接ではなく広い行為。性的虐待を疑うこと自体に抵抗がある。というのは、本人が語らないからである。後になってようやく分かった例が少なくない。その時気付かなくても、大人になっていく過程で、本人が気づく。そのことから、大きな障害になることがある。影響が大きい。一時保護所で見ていて、ふっと遠い目をして、何か考えている。精神科の先生の観察で相談すると、「乖離」であると。子ども自身が自分で整理できない。自らいなくなる「乖離」という症状。突然のパニックを起こす。大人になって心身をやられてしまう。子どもの心を癒していく治療方法について、丁寧に取り組む必要がある。

19　心理的虐待
家庭で放置。無視。大きな傷を残す。DV の目撃。子どもは一生忘れることはできない。

20　虐待が起きてしまう要因(原因ではない)
なぜ要因かというと、「なる可能性がある」もの。家庭の機能に様々な要因がある。家庭が不安定になって虐待する。そういった状況に追い込まれる。家族が地域で孤立していたら、悪い経済状況が重なってきたら、追い込まれて起きる虐待は保護者を責めても解決しない。虐待をされた子供が、大人になってもそれをやる数は実際には少ない。自分が子どもを大切にするのは大変なことが、分かっている。この感情がある。絶対に虐待しない。自分が虐待されたのに、されていない我が子どもに嫉妬を感じることはあるが・・。みんなするわけではない。

21　経済的困難
社会的孤立が大きな要因。

22 親の要因
望まない妊娠での出産。相談できる人がいない。行き詰ってのストレス。親御さんの発達障害、精神的な要因。それらの要因が重なった時。

23　子どもの要因
子どもの疾患や障害で親が追い込まれていく。子どもと親に支援がいくようにしなければならない。なつかなかったから、だからたたいた。発達障害の親の会の人に聞くと、昔は全然わからなかった。腹が立ってたたいた。風呂場で暑いシャワーをかけたことがあった。今はあんないけないことをしてしまったと後悔しているという。親も子どもを適切に見られない。養育力のアセスメントが必要である。

24　家庭の要因
家庭の中が機能しない。家族の数だけ当たり前がある。例えば、私の妻は九州出身で、まったく家のいろんなことが違う。散々もめて、すべて負けましたが…(笑)。

25　多問題家族の中で暮らす子ども
貧困、病気、孤立、子どもが子どもでいられない。子どもがしなくていいことをやらなければならない。ヤングケアラ―、ネグレクトの家庭に見られる。実際には大勢いる。子ども食堂から見えてくることがある。親が昼夜働いて子供が家事をする。大きくなるにつれて、「どうも家はおかしい」。色々なことに気付く。将来にわたって、自己評価が低くなる。希望や理想が持てないことから、ハンディを持つきっかけに結びつく。

26　虐待に気付くための気になる子どものサイン
色々なサインがある。子どもと接する人は、大変な状況になるとサインを出すので見つけて

ほしい。出せるように、また、サインに気付くことも必要である。怯える。表情が乏しい。不自然なサイン。極端な無口。そこから、家庭が見えてくる。残虐な行為。乖離も入ってくる。拒食や過食。まじめな子が持ち物を揃えてもらっていない。よほど家庭が厳しい状況等が見えてくる。

27　虐待による子どもへの影響

子どもの虐待は権利の侵害であり、心身に影響が大きい。頭がい骨骨折や脳の損傷など、性感染症も実際にある。愛情の発育不全。情緒や信条の部分に脳委縮があると医学的に言われる。愛情遮断症群　、愛情遮断性小人症。 心に拒否感が出て、体重がどんどん落ちて行く。五歳で十キロだけの体重で、ガリガリでおなかが出て行く。自分が大切にされてないと、心も、乖離やフラッシュバックがある。不安や孤独、怒りがある。様々な形で出てくる。

28　援助の特質

児童相談所も役割を果たせとの世論。保護者の意に反して介入しなければならない。親子分離をしなければならないとき、どうやって戻すかが課せられている。まず子どもの安全対策と必要な介入を行う。

29　発生予防のための支援

発生予防、特に、妊娠期間中が不可欠である。望まない妊娠や、生活困窮が虐待事例になる。支援が必要であるが、なかなか見えない。そういうケースは、受診も検診もしていない。相談できる場を構成することが、社会に求められている。家族を孤立させてはいけない。経済的な問題を支援する方法を伝える。子どもへのかかわり体制を確立し、虐待につながっていかないように支援する。通報で緊急訪問、子どもだけが泣いている。夜中、手紙を残す。翌朝になってなんてことをする親だということになるが、昼働いて、夜中にも仕事に行っている。何とか子どもだけで頑張っている。深夜労働で結構な数いる。子どもだけでいるところに、もし火事でもあったら。

30　早期発見と対応

一番根本に、食べて行かれる社会の仕組み。民間が助けてではない。公的な責任となる。虐待の通告は義務。虐待の恐れがあるとき、虐待相談の市の窓口か児相に「いちはやく」が虐待通報ダイヤル。「有料」である。夜間通報ダイヤルは、24 時間夜間や休日の担当者携帯につながる。電話が鳴るとぞっとした。長年していると、早く対応しないと、と思うようになった。明らかに虐待と分かったら、説得に応じなくても保護する。過酷な仕事である。 勤務先では、八人中四人が病休になった。過酷な現場である。そこには、改善が望まれている。

31　早期発見と対応

「今日来ていますか?」安全確認は 48 時間ルール、その間以内にしなくてはいけない。どんなに時間をおいても、土日があったから、月曜までおかないということでのルール。臨検とい

う立ち入り。親子で暮らせるようにすることを大事にするが、親権喪失もある。ルール化されている。

32　支援の基本姿勢
虐待の家庭でもいろいろな問題に直面して困っている家庭を支援することが前提になる。
その家族に責任を求めるのではなく、背景にある問題に目を向ける。健康な部分に目を向けて働きかける。

33　児童・家族への支援
親子の再統合に向けて、回復プログラムを立てる。

34,35　市町村の役割
地元の市や町が役割と支援へ向けて、関りが持てるかを模索する。（話題になった）明石市では、子どもに対する取り組みがすごい。児童福祉司の数の配置では、7 人が 18 人に増加した。福祉専門職のネットワークが重要である。児童相談所への配置。どう守って支援を続けていくのか。個別の事例に対して細やかに。市民の皆さんが問われている。関係機関を持っている。市単位で。

36　関係機関の連携
県の児相は、児童相談所以外を経験できない。地域に戻っての対応に関係が持てない。経験が蓄積されない。人口規模によって、市民のネットワークと児童相談所がつながっていくことが大切である。そこに NPO や市民団体、要保護児童会議に入ってもらうことが重要である。

37　一時保護所での子どもの生活
大変な状況から保護されている。子どもにじかに触れて、学ぶ環境にない、勉強ができるようにしないといけない。高校受験があるから、受験勉強をする必要がある。合格が決まらないと、どこに行っていいのかわからない。個別に勉強を見ると頑張るものである。学ぶ意欲を引き出す。

38　社会的養護の現状
四万五千人が里親等や施設で暮らしている。家庭で暮らせない。

39　進学就職の現状
高校卒業後は大学や専門学校への進学が困難である。安くアパートを借りたりして大学に行くのは難しい。重い課題を抱えた子どもほど、先に社会に出るしかない現状がある。

40　家族支援と教育支援の必要性
家庭を支援していくことが大切である。本当に生活に困窮している。その中で起きている。学べる環境が無かった子どもたちが支援を必要としている。

41　地域だからできること
子ども食堂は、支援の入り口になる。 大変な状況が見えてくる。すくすく広場の学習支援は、子どもと家族が地域とかかわっていく中でそういう活動をしている。市民との交流、関係機関との交流が、子どもや家族を守るしくみと提言していく。運動を担っていく。

42,43　あんしん母と子の産婦人科連絡協議会
熊谷鮫島クリニック病院に入院しながら中高生の出産支援を行っている。 病院間で支援を行っている。特別養子縁組等支援をする。

44　子どもの権利条約
権利条約　家庭で暮らすことができない子を支援していく。それに代わる家族のもとで生活させる。

御清聴ありがとうございました。

【記録　山口】

（キリン福祉財団地域のちから応援事業助成金により実施しました。）

３月アンケートのまとめ

赤嶺　菊江

すくすく広場子ども食堂をご利用されている保護者の方達から、こんな声が届いています。これは 3 月中旬、すくすくが行ったアンケートにもとづき、赤嶺がまとめて見ました。

アンケートは、すくすくを積極的に利用されている方達を中心に、14 のご家庭に配布し、そのうちに 12 軒のご家庭から回答がありました。ご協力ありがとうございました。スタッフ一同、たいへん励みになりました。頂いた回答の全部を報告する事は無理なので、その中からいくつかを報告させて頂きます。

まず、**すくすくを知った経緯**は、保育所.幼稚園.学校.公民館からのチラシが多く、次に多いのが知人.友人からのお誘いでした。中にはネットと言う方もいらっしゃいました。

これからもすくすくを利用したいか？という質問は、全員が「はい」でした。
すくすくで**一番楽しみにしているのは**、ほとんどの方が遊びと食事でしたが、保護者同士の交流も楽しみにされている方が何人かいらっしゃいました。

創意工夫に努力を惜しまずに取り組んできた**遊び**への回答は、その努力が報われたと思える結果となりました。親子共々、すくすくの遊びを楽しんでくれています。特に外での遊びへの期待が大きいように思います。
食事についても、みなさんほぼ満足されていました。野菜たっぷりのメニューに感謝感謝の気持ちがとてもよく伝わってきました。中には、スープの味をもう少し濃くとか、ハンバーグや唐揚げなど子ども達が喜ぶメニューを増やして貰えたらと言う回答もありました。

気に入っている**会場**は、不動岡公民館が一番多く、次が羽生の杜でした。

すくすくの魅力や今後への期待は、食事付きの遊びの場であること。異年齢の幅の広い子ども達の参加があること。スタッフが優しく楽しい方達で、程よい距離で見守ってくれること。食事の時に、もう少しスタッフの応援があると助かりますと言う声もありました。また、親子で食事やおやつ作りなどもやりたいと言う声も出ていました。

スタッフに混じってやって見たいことは？という質問には、残念ながら今は子どもが小さいので無理と言う回答がほとんどでした。すくすくは保護者の方達にとっては「休息の場」のようです。でも、中には、絵本の読み聞かせや企画、調理のお手伝いなどをやってみたいと言う方もいらっしゃいました。

すくすくのホームページは、いつも見ていると回答した方が結構いて、見ていないと回答された方はお一人でした。その方も今後は見ますとのメモが書いてありました。

このアンケートを行った時は、まだ新型コロナウィルス感染拡大による休校が始まったばかりの頃でした。なので深刻な状況はまだまだ生まれていなかったように思われます。それでも、ずっと家の中で過ごさなければならない中で、**親子共々ストレスが溜まってしまう**ことや、**宿題**が多く、中々はかどらないで困っている様子なども伺えました。

このアンケートを行ってから既に３ヶ月が過ぎ、学校もやっと始まりました。この３ヶ月間どんな状況の中で、子ども達は過ごしていたのか？心配です。学校現場はこれからが勝負と言えるのではないかと思います。
以上、簡単ですがアンケートの結果を報告させて頂きました。

一般社団法人すくすく広場では、すくすくのあそび広場や小中高生勉強会などで活動するボランティア、会員として支えてくださる方、食材や資金のご寄付などを募集しています。

詳しくは「すくすく広場　加須」で検索するとホームページでご覧になれます。

お問い合わせは、事務局戸恒（090-2411-8598）まで。